

ベトナム・ドンラム村集落保存計画

建造物研究室では、今年度より3年間の計画で、文化庁による国際協力事業への協力及び昭和女子大学との共同研究として、ベトナム北部の集落保存計画策定調査をおこなっています。でも、なぜ奈文研がベトナムなのでしょうか。

奈文研では、日本各地の歴史的町並みの調査を昭和40年代から続けており、近年でも高山市、権川村と、継続的に調査をおこなっています。ベトナムの集落保存計画調査は、この日本での蓄積を活かす格好の機会となります。我々が調査・研究の対象としているドンラム村モンフー集落は、首都ハノイの近郊、ハタイ省の一集落で、伝統的な集落形態を完全に残した、貴重な存在です。集落内の建物はどれも似た造りで、手探りでわずかな違いを探していくことになりますが、ベトナムには民家についての体系的な研究が存在していないため、この調査には、対象に正面からぶつかって民家史と集落・都市史を一から立ち上げていくような開拓感があります。

それだけではありません。ベトナムの民家は、東アジア木造建築の本質的な意味について考えさせてくれるものもあるのです。ベトナムの民家は、梁の組み方に独自の形式を持ちながらも、その基本は中国建築と共通しています。モンフー集落内に現在残っている民家はほとんどが19世紀以降に建てられた比較的新し

いものですが、その形式の素朴さゆえにむしろ古い中国建築の姿を伝えているように思われるものがあります。その建築は、例えば入母屋屋根を持つ建物の場合、日本では隅の間を正方形にするのが一般的であるのに対し、桁行と梁間を違えたまま組み上げたりしています。このような違いをまのあたりにすると、屋根形式と構造との関係について抱いている常識に再考を迫るような、言いしれぬ力強さを感じさせられます。

こうした考察は、われわれが日本の古代建築について研究する際の姿勢と似ています。古代建築は、建築を成り立たせる個々の基本要素について、根源に立ち返って問い合わせることのできる素材だからです。ベトナムの民家、集落の調査は、そんな、奈文研が果たすべき建築史研究への貢献の延長上にあるものだと考えています。

(文化遺産研究部 清水重敦)



ドンラム村モンフー集落の路地

吉備池廃寺発掘調査報告の刊行

奈良文化財研究所がおこなった発掘調査には、近年、世間の注目を集めたものが少なくありません。吉備池廃寺もそのひとつです。

この遺跡は、当初、瓦窯跡と推定されていましたが、1997年から5年間にわたる調査で、飛鳥時代の大規模な寺院跡であることがわかりました。巨大な金堂と塔を東西に並べた伽藍配置としては、最古の例となります。

堂塔や伽藍の規模は、同時代の国内寺院をはるかにしのぎ、新羅の皇龍寺や藤原京の大官大寺に比肩します。そこで、639年に舒明天皇が創建した最初の勅願寺「百済大寺」の跡と目されることになりました。瓦をはじめとする遺物の年代や出土状況も、そうした想定を裏づけています。

各年度の発掘調査の概要については、奈文研年報・奈文研紀要で公表してきましたが、このたび、一連の調査の正式報告が刊行の運びとなりました。これを基礎資料として、今後の研究がいっそう進展するものと期待されます。

なお、本書は、『大和 吉備池廃寺』という書名で吉川弘文館から市販されています（A4判、上製、箱入り、274頁、図版72頁、税別9500円）。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 小澤 毅)

